
僕を照らした光 僕が照らした光

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕を照らした光 僕が照らした光

【Nコード】

N72810

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

三人一緒に幻想入りの主人公が一人、進を視点に描いた、特別記念短編！！

(前書き)

どうも、「三人一緒に幻想入り」でお馴染みだと思っている澄田康美と申します。

今回の短編は、PV10000、ユニーク2000を記念して、

書こうと踏み切った話です。

あえてほとんどサイレントでやってみます。なのでわかりづらいかもしれません。

とりあえず本編にそこまで影響の出る話ではないと思います。

ではどうぞ。

あれは、僕がまだ正や陸とまだ会ってなかった頃だった。

僕には、本当のお母さんとお父さんがいた記憶がないんだ。

だけど、本当じゃないお母さんとお父さんがいた記憶はあった。

二人とも、僕に愛情を持って育ててくれた。

だから、僕は本当のお母さんとお父さんじゃなくても、十分幸せだった。

でもある時に、僕はどうしようもないくらい寂しくなった事があった。

友達のみんなと公園で遊んだ後に、

みんなのお母さんやお父さんがみんなと一緒に帰っていった時に、

僕はなぜか、友達や友達のお母さんとお父さんの笑顔を見て、心が痛くなった。

なんでだろう？なんで僕は　　こんなに心が痛いんだろう？

原因もわからないまま、僕は胸を抱えて、みんなが帰っていくのを黙ってみていた。

みんな、本当に楽しそうにしてた。

みんな、本当に嬉しそうな顔をしてた

みんなみんな、同じ気持ちだったと思う。

だけど、僕だけは違っていた。

僕だけが一人の気分だった。

一人じゃないのに、一人の気分だった。

少しして、公園に僕は一人になった。本当の意味で一人になった。

夕焼けが差し込んでくる公園に、僕は一人、ブランコに座ってぼーっとしていた。

ブランコを漕ぐ気にもなれずに、僕はぼーっとしたままだった。

家に帰ろうって気に、どうしてもかなれなかった。

今日は確か、お母さんもお父さんも仕事で帰りが遅いって言ってた。

だから、家に帰っても結局一人なんだ。

本当の意味で一人なんだ。

そう思ったら、僕の目から雨が振った

それはどんどんひどくなって、その内僕は、声に出して降らしてい

た。

誰もいない公園に一人、僕は雨を降らしていた。

僕がそうしてずっと、雨を降らしていると

誰かが、僕に傘を差し出してくれたんだ。

いや、正確に言うなら、その子は傘を差して、僕に話しかけてきたんだ。

多分日傘だったと思う。もう日も落ちるって時に、僕は変だなと思っただ。

そう思った直後に、その子は僕に対して傘を振り回してきた。

意味がわからなかったけど、その時の僕は楽しくなっていた。

その時に、雨が止んだのははっきりと覚えている。

日が暮れそうになった時に、その子は疲れ果てた様子で地面に寝転がっていた。

僕はその隣で、同じように寝転がった。僕もちよこつと疲れてたからだ。

僕とその子は、寝転がりながら、色々喋りあった。

何を喋っていたのかまで覚えてないけど、とっても楽しかった。

たくさん友達と遊んでいる時よりも、楽しかった。

どうしてかわからなかったけど、本当に楽しかった。

散々喋りつくした後で、僕はそろそろ時間だと思って、家に帰ろうと思った。

その時に、その子が僕の腕を掴んできたんだ。

腕を掴んできた後に、顔を真っ赤にして、そっぽを向きながら、

僕にこう言ってきたんだ。

私の家に、来てくれない？

僕はこのまま家に帰っても仕方ないと考えて、その子の誘いに乗った。

しばらくその子と一緒に歩いていると、とんでもない豪邸が見えてきた。

僕の家はアパートだけど、

その豪邸は横の広さならアパートなんて目じゃない大きさだった。

しかもそれが、その子の家だなんて言うんだから余計びっくりした。

執事とかメイドとか色んな人が見送る中で、僕はその子の部屋まで案内された。

部屋にいる間は、別段変わった事はしなかった気がする。

公園で二人つきりできていた話の延長戦のような物だったかな？

その内に、夜も遅くなって、さすがに帰らなきゃ駄目になったから、

僕は色んな人に見送られながら、自分の家に帰っていった。

帰る前に、また話をしようと言われて、僕はいいよと返事をした。

その日から、僕はその子とよく遊ぶようになった。

大体の遊び場所はその子の家で、いつも二人つきりだった。

そうやって遊んでいる内に、その子って人間がわかっていった。

最初会った時の印象はお嬢様みたいなイメージだったけど、

こうして二人で遊んでいる時は、わがままっぷりと素行の悪さが凄かった。

むしろ、近所でよく見かけるおてんばな子と同じレベルだった。

そんな彼女と一緒にいるのが、本当に楽しかった。

たくさんの友達と遊んでいる時よりも、ずっと楽しかった。

ある時、彼女の両親と思える人が家にいるのを見た。

彼女がその時、変にそわそわしていたのを覚えている。

普段は見せない彼女の顔に、僕は不思議に思った。

だけど、直接聞いたりはしなかった。聞いたら駄目かなって思ったから。

その時に、僕は聞くべきだったって気づいたのは、それから少しも経たないある日だ。

僕はいつものように、その子の家に行ったら、門の前で彼女から駄

目だって言われた。

今日は習い事とかなかった日のはずなのに、どうしてだろうか？

僕は理由を尋ねたけど、なぜか答えてくれなかった。

しつこく僕が尋ねると、その子が怒り出して、僕を追い出すように言ってきた。

僕もむしゃくしゃして、その日は他の友達と遊んだ。

友達と遊んだ後で、また一人になった僕は、

あの時と同じように公園のブランコでぼーっとしていた。

あの時と違って、涙は出なかったけど、寂しさはあった。

どうしてかわからないけど、その時の僕は、彼女が来ると確信していた。

根拠なんてないのに、彼女が来てくれると信じていた。

少しして やっぱり彼女は来てくれた。

初めて会った時と違うのは、雨を降らしているのは彼女の方だった事だ。

なんで雨を降らしているのか、その時の僕はよくわかっていなかった。

とりあえず僕がした事は

些細なイタズラだった。

その事で彼女は暴れだしたけど、それと同時に、彼女の雨は止んでいた。

それがわかった時の僕は、不思議な感覚に襲われていたのを覚えている。

二人して、あの時と同じように寝転がって、話をして、時間が経っていった。

あの時とまた違うのは、夜になって、星空が見えるぐらいにまで、話をした事だ。

その頃になって、彼女の家の執事が公園に走ってきて、

彼女を連れ去っていったんだ。

その時はあまりにも一瞬だったけど、僕達は確かに約束したんだ。

また遊ぼう

たわいのない子供の約束だけど、その時は本当に特別な事だと思えた。

そうだ、また彼女と遊ぶ事が出来る
その時の僕は、そう
素直に思っていた。

だけど、翌日から彼女の家はなかった。

どこに行ったのかもわからないまま、彼女は僕の前から姿を消してしまっただ。

「チルノ？起きてよチルノ、起きてっば」

妹紅と戦い、自爆して気絶したままのチルノを、僕は声をかけて起こそうとした。

「ん？進？」

「よかった、やっと起きたあ」

「あれ？アタイどうなったの？あの女はどこに行ったのよ！？」

気絶してただけあって、状況をさっぱり理解できていない様子だった。

妹紅が僕の後ろから、冷ややかな声を出してきていた。

「お前が探してるのは、あたしだろ？」

「ああ！！あんたよあんた！！戦いのケリはまだついて『ついたってば』」

チルノが言った事に水を差した僕に、当然チルノが怒ってきた。

「何よ進！！あんたは関係ないでしょ！？すっこんでてよ！！」

「いや、だからチルノが自爆して負けになったんじゃないの？」

「あ、あんなの負けに入らないわよ！！さあ、勝負！！」

むきになるチルノを、僕は必死に引き止めた。

これ以上戦っても、チルノじゃまず勝てないだろうと考えた上だ。

妹紅もそれぐらいわかっていた。だから妹紅は軽く笑った後に、その場を去っていった。

「ははは、その負けん気だけは買うよ

機会があつたら、また勝負しようじゃないか」

そう言い残して、妹紅は去っていった。森の中に消えるように。

さすがのチルノも、目標が失えばあきらめもする。

が、認められた負けん気はしっかりと発揮していた。

「へん！！アタイに負けるのが嫌だから、逃げたのね！！」

そんな訳ないよと言いたかったけど、チルノの耳に念仏だろう。

そろそろって所で、Kおじさんが僕らに言ってきたんだ。

「よし、今日はここまでにして、そろそろ帰るとするか」

僕ら二人はその提案に乗り、人里へと歩いていった。

僕はちょっとだけ疲れてたから、歩くペースが遅くなっていた。

その事がチルノには気にいらなかったのか、チルノは僕の腕を掴んで、走り出した。

「そんなちんたらしてないで、さっさと行くよー!!」

「ちょっと!?!そんなに急がないでってば!!!」

チルノに引つ張られながら、僕はいやおうなしに走らされてしまった。

そんなチルノに僕は

彼女の存在を被らせた。

いや、僕の腕を掴んで走ろうとした一瞬に、僕は彼女を見た。

その時になって、僕はようやく気づけたんだ。

たんだ。

そうか、今の僕にとっての彼女は

チルノだっ

僕は彼女の手引に張られ、Kおじさんに少しだけ笑われて、人里へ走っていった。

あの時よりも、もっとおてんばな彼女に引張られて

三人一緒に幻想入り 第二十二章 謎の者、参上！！に続く

(後書き)

後書き

どうでしたか？進の過去を舞台に描いてみた話ですけど。

ちょっとシリアスが強すぎたかもしれませんが、ただど作者はシリアスが得意なので、

つついシリアスを書いてしまうのです。

とりあえず、自分内では満足のいく内容だと思ってます。一応。

これからの進とチルノは一体どうなるのか？それはもちろん原作にてどうぞ。

多分この話は原作と絡ませるような事はしないとします。多分しないよ？

スペシャルサンクス

鳥間 進 様

彼女

チルノ 様

藤原 妹紅 様

K
様

これを読んでくれたあなた

では、このような粗末な駄文をお読みいただき、

真にありがとうございました（*^|^*）

by 澄田 康美

P.S、おてんばな子は可愛いと作者は思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7281o/>

僕を照らした光 僕が照らした光

2010年11月5日20時57分発行